金湘圭の芸術世界と舞踊芸術

漢陽大学　玄　悕禎
大邱カトリック大学　金　素羅

1．目的

金湘圭は（1922－1987）は，石井漠に学び，韓国の大邱で，新舞踊を普及した舞踊家・研究者である。彼は，激動期に，崔承喜，趙沢元らに続き，韓国舞踊の現代化をはかり，新舞踊（西洋舞踊）を韓国化した。本研究では，彼の韓国における業績とその思想を明らかにすることを目的とする。

2．方法

彼の書いた論文，新聞雑誌等の記事，彼についての文献を検討し，聞き書きを行うとともに，遺作を考察する。

3．韓国の近代舞踊の導入過程と金湘圭

1）近代舞踊の導入過程

韓国の新舞踊の始まりは，1926年3月21日，石井漠が京成公会堂で“新舞踊公演”を行ったことが嚆矢である。「新舞踊」は日本からの流入語として洋舞であり“創作的なものを加えた踊り”の意味であった。

石井漠以来「芸術舞踊」の系譜が形成され，韓国の新舞踊の主流となった。

2）金湘圭（1922－1987）

水晶小学校を卒業後，湘圭は，東京留学し，10余年間を過ごした。1946年の帰国後は，大邱を中心に韓国現代舞踊の普及をはかった。

1949年，万景館の初公演は，『朝鮮舞』『アリラン三調』『閑良』『黄真伊』であった。これらは国を亡くした弱小民族としての思想的背景を持ち，現代舞踊の方法で新しい韓国舞踊をつくった。

彼の芸術作品に共通する基本姿勢は，暗黒時代の状況の中でも，希望をもって生きていく民族魂を謳いあげたものである。彼は「ただ技法を西洋の方から学び，身につけただけで，どうして韓国人が韓国の精神をもって西洋舞踊をすることができるか」と言ったという。

湘圭は「人間尊重思想」を基にしている。これは，石井漠の影響もあろう。例えば，彼の作品に「登山」がある。上体の力を抜き，苦しみを忘れ，登頂した歓喜の表現をする作品であるが，この作品の題目と石井の作品は同一である。

4．金湘圭の舞踊作品の考察

1）宗教的背景

東洋思想をもとに，仏教から材をとっているものがある。

『創造の神』:インド舞踊を現代手法で創作した作品である。「自然への共感」といえる創造，維持，罷養，再生，救済を象徴し，インド民衆の踊りと歌を代表するシバ神を描いた。

2）政治的，社会的背景

日帝植民地時代に舞踊を学び，韓国に帰り6.25を迎える受難を経て，なお愛国心を失わなかった。

『太公望』：史記の受難の時節を克服し，明るい日が来る日を待つ人々の心情を，太公望に託した作品である。

『くもと蝶々』：8.15解放記念行事の作品で公演した作品である。日帝植民地時代に国を失った悲しみを，くもの強者，蝶々の弱者として捕らえた，時代性のある作品である。

3）思想的背景

仏教の宇宙観を持ち，東洋思想に傾倒した彼は「人間尊重」を基に，自由意志を追及した。堕落した物質文明を忌避し「自然への共感」が読み取れる。

彼は，舞踊が，人類発生からあった芸術であるために「自然美」を内包していることを強調した。

『子供と大人』：子供が大人になる過程の生活を描き，深層にある純真な「きれいな心」素朴な自然美を強調した。

5．まとめ

彼の芸術は，現代舞踊の方法を借用して韓国民族の基本的な美のリズムを掘り起こし，東洋思想・韓国魂を求めたといえる。また，教育において，創造性・芸術性・表現性・民族魂の回復を，舞踊創作の実践活動と併用して，行った。民族の解放を，自らの作品に反映させた。

参考・引用文献
金湘圭（1971）造形美に現れた舞踊的素材の考察．安東教育大学
金湘圭（1973）舞踊における動的対称に対する一考察．安東教育大学
金湘圭（1976）小学校における舞踊教育の実態．安東教育大学
金湘圭（1985）舞踊創作の助言になれる知的な一考察．安東大学
金湘圭（1986）宗教儀式舞の一考察—仏教伝来による相悦以歌樂を中心に—．安東大学
金湘圭（1987『現代舞踊とイサドラ・ダンカン．安東大学
朴成実（1997）韓国近代舞踊史に現れた金湘圭の舞踊研究—教育者的成長過程を中心に—．ソウル中央大学教育大学院